

山水画家の創作活動の研究

高 城 早和子

1. 問題と目的

本研究の目的は、人間に特徴的な創造活動の一つである芸術創作（特に美術制作）のプロセスを、認知心理学的な手法を用いて詳細に解明することである。創造性に関する心理学的な研究は、長い間、(1)創造性を測定するためのテストの開発、(2)ブレインストーミングなど、創造性の開発技術の研究、(3)創造的な仕事をした人々の伝記等に基づいた、創造的な人格や創造的環境の研究、(4)大学生に洞察パズルを解かせるような創造的問題解決の研究などが中心となってきた（Sternberg & Lubart, 1999）。しかしながら、このようなアプローチでは、「芸術家や科学者など実際に創造的な活動を行っている人たちが、どのような知識や技術、価値観を持ち、どのような認知プロセスを経て、芸術的創作や科学的発見を行うのか」、そして、「彼らがどのように知識や技術や価値観を獲得していくのか」といった、創造的な人々の認知過程や学習過程を明らかにするのは困難であった。近年、そのような反省に基づいて、科学者による科学的発見のプロセスや芸術家達の創作活動に関わる認知過程について、少しずつ心理学的研究が行われるようになってきた（Weisberg, 1993）。しかしながら、創造的な活動にどのような認知過程が関わっているのかという点について、描画過程の記録に基づいた詳細な検討はまだ十分に行われていない。

我々は、1998年の5月から約3年近くにわたって、知多市在住の文人画家、K氏の創作の様子を観察してきた。K氏（59歳）は、名古屋や京都を中心に、アメリカやフランスなど海外でも創作を行ってきた文人画家であり、寺社仏閣の襖絵製作を中心に活躍してきた。これまで、氏が寺社やアトリエで山水画を制作する過程を、2人のフィールドワーカーが、延べ30日以上期間にわたり観察し、ビデオ記録やインタビューのデータをもとに、山水画の制作過程における創造性を探ってきた。

氏は、絵を描く際に、観客が紙の上に墨で描いた落書きの線を利用して、観客の目の前で即興的に自分の作品を作るという独特の制作スタイルを持っている。また、通常、絵画の制作では、途中で何度も修正を加えたり、構図の変更を行うため、長い時間がかかることが多いが、氏の場合は筆の勢いを大切にするという文人画の伝統に基づき、完成までの時間が数時間から数日と比較的に短い

ことが多い。これは、我々がこの研究を進める上で、観察時間や労力の面で大きな利点となった。

芸術家の中には制作過程のビデオ撮影を嫌がる人が多いが、氏は我々の研究に理解を示し、制作の場に立ち会い、記録を取ることを許可して下さったり、以前から描きためた練習のスケッチブックを見せていただいたり、いろいろと御協力いただいた。時には、氏の制作の様子を丸一日観察したり、数週間寝食を共にし夜遅くまで語り合ったりすることもあり、質問紙調査や短時間のインタビューでは得られなかったであろう、芸術家の人となりにもふれることができた（岡田・高城、印刷中参照）。

既に述べたように、芸術作品の制作過程に関する認知的な研究がまだ十分に進んでいない現状にあっては、研究の観点や問題の枠組みを構築し、創造的な研究を行うためには、まず、創作活動の詳細な観察や芸術家への深いインタビューなどをおこなって、現実即した創造活動のあり方を詳しく知る必要があると思われる。その意味では、本研究の対象者と良い関係を築くことができ、このような形で観察を行えたことは、この研究を進めていく上で非常に大きな効果をもたらしたと思われる。

本研究では、「画家がどのような知識を持っているのか」、「その知識がどのような認知過程を経て、どのように利用されるのか」、「作画のアイデアがどのように生まれてくるのか」、「外的制約が描画の過程にどのように関わっているのか」などの問題について、画家の創作現場でのインタビューの記録や創作の様子のビデオ記録の分析をもとに、検討を行う。

2. 研究1：山水画制作者の持つ絵画制作に関わる知識 —インタビュー分析—

目的

研究1では、本研究の対象者である氏の、山水画に関する様々な知識やこれまでの経験、絵画制作についてインタビューを行い、どのような知識を実際に有しているのかを検討する。

方法

対象者：知多市在住の山水画家

手続き：襖絵などの制作イベントがおこなわれる数日

前と、制作終了直後、イベント終了数日後に、それぞれインタビューをおこない、イベントのため今まで行ってきた準備の様子や練習方法、制作中に考えていたこと、できあがった後の感想などを中心に訊ねた。

インタビュー

think-aloud法で言語的に報告させることで、描画の過程が変わってしまう可能性があるため、インタビューをおこなった。

コーディングのためのカテゴリー

セグメンテーションのルール

インタビューで話された内容は、発話者が変わるところや、長い沈黙のあった場合は、その会話が終わったところを1ユニットとして、発話の最小単位とした。その後で、会話で語られたトピックに関わるユニットをつなげる作業を行った。

コーディングのカテゴリー

絵を描くために必要な知識に、どういったものがあるのかについて、インタビュー内容をまとめたセグメントに分割し、そのセグメントの内容をカテゴライズする。

結果と考察

山水画を描くために必要な知識は以下に示すように、いくつかの種類に分けることができた。「芥子園画伝」と比較すると、インタビューで説明された知識はごく限られた部分だけであった。一方で、描画法の詳しい説明よりも、「なぜこうやって描くのか」といった理由の説明が多くなされていた。

＜1の山水画を描くことに関わる様々な知識＞

1. 1. 「ストラテジー」についての知識…

「1. 1. 1. 一般的な描き方の知識」：一般書物にも書かれているような山水画の知識のうちで、氏のインタビューで語られたもの

「1. 1. 2. 落書きの利用法」：落書きをどうやって絵にしていけるのか、また、描きにくい落書きや絵にならない落書きがあることから、落書きを書くときの決まりや制約

「1. 1. 3. 失敗したときの対処」：絵を描きすぎてしまったり、バランスが悪くなったときなどに採る方法

「1. 1. 4. 様々なものの特徴」：墨の特徴や山水画の特徴、東洋画や西洋画の特徴、また、道具に関する事柄まで、様々な知識

1. 2. 「絵の評価基準」についての知識…

「1. 2. 1. 全体的な絵の評価基準」：絵の善し悪しを作品全体で判断するときの価値基準

「1. 2. 2. 描き方に関する評価基準」：例えば、

筆数を少なく描いた方がいい絵になるとか、形にこだわって描いた絵は線が死んでいるといったこと

と「1. 2. 3. 線に関する評価基準」：「生きたのびのびとした線」とはどういったものかという、線の善し悪しについて例を示しながら説明したもの

1. 3. 「心構え」…氏が様々な経験の中から培った、絵を描くための心構え

3. 研究2：山水画の描き方の教示方法

—授業の分析—

目的

研究2では、氏に山水画を教える授業を行ってもらい、その時氏から説明される、山水画制作に関わる知識を検討する。

方法

対象者：愛知県知多市在住の山水画家と授業に参加した大学1年生20人。

手続き：大学の授業（90分）で氏に山水画の描き方の講習してもらった。尚、この授業の分析に加え、氏が10年前、水彩画クラブの有志に対しておこなった授業を研究の対象に加えた。

結果と考察

アメリカと日本の教授場面を比較したところ、教授内容が同じようなものであったので、2回の場面をあわせて分析をおこなった。その結果、授業場面で説明された山水画に関する知識は、いくつかの種類に整理することができた。教授場面で氏が説明した、絵の善し悪しの判断についての話から、「線が大切である」、「筆数少なく描いた絵がいい」、ということが、絵の評価基準としてあげられているのがわかる。また、「芥子園画伝」と比較すると、全ての描画法について説明がされているわけではなく、制作に必要な最低限の手順を教えるにとどまり、一方で「画伝」には書かれていないことを説明していた。「絵の中心に重みを付けると、背景が生きてくる」、「線と線をつけずに開けて描いた方が、ゆとりのある絵になる」ということが説明されており、「画伝」には書かれていないことである。さらに、画面が黒くなったり濃い部分があちらこちらにあるのは絵としてよくないと説明しており、これも「芥子園画伝」には記されていないものである。このことから、氏は、絵の基本である「気韻生動」を保つためには、絵が黒くなったりごちゃごちゃしたものになるのは避けるべきだと考えていることが分かる。「気韻生動」については、氏が最も重要なものと考えている絵の基準であり、「芥子園画伝」やそれ以外

の描画法の本でもっとも大切なものとして取り上げられている。しかし、古い中国語で書かれているだけでなく、表現も抽象的でとらえにくいものであるため、その解釈においては諸説があり、共通見解は存在していない(佐々木, 佐々木, 1998)。具体的に何に気を付けて描くのかといったことは、描き手によってそれぞれに存在するといってもいいだろう。本研究の授業場面においては、氏の基準が上述のような具体的な言葉で説明されたのだと考えられる。

研究1と2の比較とまとめ

「山水画の描き方」について

研究1と2で現れた「1. 1. 1. 山水画の描き方」に関する知識は、教授場面の方が、筆の使い方などの道具の具体的な使い方が説明されており、作画のための手続きの説明においても具体的に教示していた。さらに、両場面において重複して説明していた描き方が、説明の観点が若干異なっている様子がうかがえた。

4. 研究3と5. 総合考察は、研究上の都合により本稿では掲載を控えた。